



第45号
発行日 1月11日
発行所 真徳山 天林寺
発行者 伊藤文元
〒430-0905
静岡県浜松市中区下池川町27-1
TEL (053) 471-6226
FAX (053) 471-6234

「今」をしっぴかり生きる



天林寺住職

伊藤文元

ご挨拶

令和四年壬寅仏紀二五八八年、西暦二〇二二年の新年に当たり、檀信徒の皆様方のご健康とご多幸を心より祈念申し上げます。

新型コロナウイルスの感染が日本では下火に落ち着いてきました。このまま休息するのかと思いきや新型のオミクロン株が勢いを増して、心配の種です。油断は禁物です。マスクや手洗い、三密を避けて感染しないよう気をつけましょう。

無事の尊さ、ありがたさ

平穏無事は、何よりも幸福で平和な状態であります。

「無事これ貴人なり」という言葉があります。この言葉の意味は、「無事であることは貴公子の

ように幸福な人である」ということのようにです。無事で何事も起こらない、ということはない。なか困難なことで、平穏無事な日は本当に稀なことです。このような日は一年の内でもほんの数えるほどしかないのではないのでしょうか。

あなたはこの一年間、家族の人が病気せず、たいしたケガもせず、それぞれのお子様の学業やご主人の仕事が順調に進み、家庭内に何のトラブルも、心配もなく暮らすことが出来たでしょうか。もしあなたのご家庭におかれまして、この一年間が何事も無く、平穏無事に過ぎたとしたならば、こんなに目出度く、尊い年は無いと云えましょう。

国内はもとより、世界各国では様々な問題が、毎日毎日、まるで泉のように湧いて出てくるのが現状であります。世界を一家族と考え、今日一日が何の事件も無く終わったとするならば、これは、祈念すべき「吉日」であります。世の中に事件が起こらないということは本当に稀なことであり、平和な日は不思議と云ってはいくらも数が少ないのであります。それ故に、平穏無事な日は、まさしく「仏さまの日」といふべきであります。

なぜ「今」…が大切な

私どもがお読みする『理趣経』というお経の中に「常恒三世一切時」という一節があります。この意味は、「過去、現在、未来の三世は、いかなる時でも、いかなる状態でも常にその中にすべてのものが含まれている」という意味です。時間は目には見えませんが、人間の概念として、あるいは自覚する人間の社会的約束ごととして、時間というものがある。決められています。現実には存在するものは「今」だけです。動物や植物には時間の概念はないでしょう。現在起こるいろいろな状況に対してひたすら適応しているだけのようです。彼らは実に頼もしく今を生き抜いています。動植物には、やがて死んでいく

ということの不安や、将来への恐怖心は無いものと思われれます。「今」という時間は存在そのものです。自分も、他人も、動物も、植物も、鬼も、諸仏も、諸菩薩も、すべてが同時に共存しています。過去や未来は影であり、幻です。現実の連続があるのみです。現在の中に、過去と未来の意味がすべて含まれています。例えば癌などの不治の病をお医者さんから宣告されたご本人は、ぶらぶらと無為に過ごすでしょうか。残された命を懸命に生きようと努力するに違いありません。一瞬一瞬が健康な人よりずっとりと重みのある大切な時間帯になります。真に存在するのは「今」ですから、一日一日精一杯に生きるわけです。

生かされている…事実

毎日毎日、静かに手が合わせられるという平凡な日暮らしは最高の幸せです。現在、私たちが生きているということは、父や母の養育のお陰であり、ご先祖様のお陰であり、国家や社会のお陰であり、自然界の恵みのお陰であります。私たちは他に厄介をかけずには生きていけないのです。

今一度、今日の無事を感謝し、生かされている「今」をしっぴかりとかみしめたいものです。



女難の相

天林寺寺族 伊藤 諦子

「私は女難の相がある」と言えば大方の人が怪訝な顔をするであろう。「女難の相」を広辞苑で引けば、「男が女との関係で、災難を受けることとあり、「相」というのはそのあらわれた吉凶を言う」とある。災難を受けるのは男なのだから女の私には当てはまらない。が、私の場合、女なれども「女難」を受けて生きてきたのである。

私は兄と弟の間の一人娘として可愛がられて育った。高校も男子校で女子はクラスに五、六人、何かとチャホヤ得をして学び、大学はバンカラ？な早稲田。私の卒論教授暉峻康隆氏の「女子学生亡国論」で侃々諤々、女性が社会に進出し初めた時代であったので、気分は肩で風切るような高揚感で生きてきた。

ところが卒業寸前、優し気な同級生と出会い結婚したのである。ここからが私の女難の始まりであった。夫は姉が四人に妹という女の中の男一人であった。姉妹は全員女学校育ち、女の国の住人である。私は旧男子校育ち。女子は男子と互角の共学世代。女丈夫で個性的、サバサバハキハキと結婚するまで生きてきたのである。嫁した家は男と夫以外は女性ばかりであった。

おまけに産んだ子供は幸せにも五人。これまた全員女性。飼った犬猫もなぜかメス？だった。

天林寺梅花講も別名「おばあちゃんコーラス」：過去に一人優しい男性が在籍したが昔々の話である。

茶道も人生の道連れとして真剣に取り組んでいる。鎌倉にある宗徧流の直門。素敵なお弟子さんも二十人程、男性一人。お茶も江戸時代までは男性のものであったが現在は女性が主流である。

「歌をうたう」という幸せが人間にはある。私の父はいつもひとり鼻唄を歌ってご機嫌に仕事をしていた。文化人類学で鼻唄は「文化遺産」のひとつとか。私も完全にこれを父から遺伝して、掃除や草取りをする時いつも鼻唄三昧である。そこで「みんなで歌いましょう」という会を月に一回天真閣で行なっている。講師は友人、伴奏はお茶のお弟子さんのピアノ。この会も全員女性である。過去に男性二人が見えたが目に見えぬ女性の圧力に負けて？いなくなってしまった。

「女難の相」というけれど人生吉ばかり凶ばかりでもないようだ。程良く吉凶ないまぜになつてこそ面白い人生となるのであるまいか？男女二種類の中で楽しく辛くもまれて「難なく」通り抜けて生きてゆくのが、面白い人生なのかもしれない。

本山修行ご報告(最終回) 貴重な時間と得難い体験

天林寺徒弟 長谷川敏正

さて、永平寺での修行も四年目に入る頃、堂行寮という部署に配役されました。この部署は、法要の際に磬しん子と呼ばれる大・小の据え置き型の鐘を鳴らしたり、木魚をリズムよく叩いたり、維那と呼ばれるリードボーカルのな役割を担ったりして、修行僧みんなどで行う法要をスムーズに運べるよう、執りまとめをします。

また、普段の修行生活に於いても、執りまとめ役をします。各法要や行事の際、いつも堂行寮が皆を集めて、指示し、教えて、物事を進めていきます。また、風紀委員的な役割もあり、自ら範を示しながら、修行生活がだらけたものにならないよう、ネジを巻く係でもあります。

そんな堂行寮で、一番プレッシャーが掛かるのが「授戒会」の準備とお勤めです。「授戒会」と言うのは、永平寺では毎年四月の二十二日、三十日迄行われていた行事ですが、一般の方(檀信徒他)が約一週間泊まり込みで、法要に随喜したり坐禅をしたり、

お説法を聞いたたりして仏道修行を実践し、仏恩を自覚し、永平寺の宛下から戒名を授かる、という儀式です。

この授戒会には数十名、百名ほどの一般参加者と、全国から百名以上の僧侶がお手伝いに来られます。大規模な行事なのですが、堂行寮は「主催者側」として取り組み、一週間のあいだ頻繁に執り行われる法要がスムーズに流れるよう管理、監督する部署と連携、また自らプレイヤーにもなつて法要にも参加します。そして参加者や僧侶がストレスなく取り組めるよう、お世話ができていくかの確認とフォローなどもします。

一週間の「授戒会」が無事に終了すると、疲労困憊：となりませんが、清々しい達成感も感じられて楽しくもありました。

永平寺での修行生活全般に言えることは、なかなか普段では味わえない経験や生活ができる、と言うことではないでしょうか。普段、当たり前にあつたものがない生活。また、修行道場でない経験できない規模の行事。そう言った、事象・体験・実践から何を感じ、学び、そして今後の僧侶としての生き方に反映させていくかが大事なのかな、と改めて感じました。



Q コロナ禍中の気休め

ひと段落していたが、新たな変異型「オミクロン」の市中感染が確認(22日)され落ち着かぬ年末初になりそう。

そこで唐突ではあるが、「落語」の話題。きっかけは暮れの大掃除の折に「お寺の高座と落語のコウザは同じ?」から。

世間では落語のコウザの方が一般的であるらしく、どうやら庇を貸して母屋を…の式らしい。寺での高座とは、座禅や説教・提唱などを行うひとときわ高く背もたれや手すりが付いた木製の台で、吾が天林寺ではお盆のお説教を頂く折に登場する。仏教伝来に従い日本に伝わったが、説法者が座る一段と高い席…を指すことからまず講談、次に落語の世界でも演者の席を称するようになった。

講談との違い

ともに舞台に座っての話芸であるが、講談は読み物ともいわれ説明口調、また「語る」芸とも言われ演者を先生と呼び、内容なども人の道などを説き、お堅い。落語は噺家(咄家)と言われ、

師匠と呼ばれる。おとぎ話から世間話、芝居話など面白おかしく表現し、必ず「オチ」(サゲともいう)を付け聞き手を納得させる。落し噺などと言われ今日、落語という名称につながる流れだ。落語の誕生と初期の歩み

資料にあたる落語の祖として安楽庵策伝を挙げているが「落語家の祖」と謳ってはいない。小堀遠州の弟子で茶人としても名を遺す策伝(一五五四-一六四三)は、浄土宗京都・誓願寺法主で紫衣勅許の高僧、話の名手。隠居後「醒醉笑」を著す。

法主のころより易しく笑いに満ちた説教が評判だったが隠居して安楽庵を結び「醒醉笑」をまとめ文字として残した為、後に落語のネタ本として活用されるものが多く、落語の祖として認められている。しかし、大名や名士の前で話すことはあっても、一般大衆の前で語ることはなかった、という。落語家の祖とはいわれない理由のひとつで、時は、安土桃山のころで信長・秀吉などの前でも語り、曾呂利市新左衛門も同僚?らしい。「落語」興津要著・講談社)

時は移って江戸期。五代綱吉の頃、京都、江戸、浪花の三都において借家や仮小屋での「辻噺」に人気が出た。また、貴人の屋敷

に招かれ演じる者や小屋掛けの興行を打つ者、二代三代と継ぐ者も出て評判を呼び、庶民の間でも人気をとった。

しかし、悪疫流行の折、ある浪人がひと儲けしようたくらみ、ある葉が効くと虚言を流して斬罪され、著者版元も連座を疑われ島流しにあった…と世の中を騒がす輩も出てくるにおよび、落語独自の風刺と権力批判の素地もあり、幕府の統制を受ける始末も生じている。

その後、立川馬場、三笑亭可楽などが活躍、それまでの副業的落語会から職業落語家も誕生して栄えていった。即席噺や三題噺、謎解きなど今日に繋がる手法を編み出し、特に門下に逸材を出した可楽は落語隆盛の基礎を築いたと言われ、落語家の祖「落語ハンドブック」山本進編・三省堂)と言われる。また、今日の落語家のほとんどがこの可楽の弟子が初代という門流で、伝統芸と言われる所以でもある。

寄席の始まりは、寛政年間(一八〇〇年ころ)と言われ、しばらくして江戸の町内に一つは数えられたという繁栄ぶり。しかし、天保の改革にて二百余を数えた寄席も十五軒(その他寺社九軒)に減らされた。かつて浜松城主であった水野忠邦も役員

とはいえ罪なことをしたものだ。ところが、失脚後は禁令も緩みかつての倍以上の四百軒を超えると共に、興業の十五日替わり、前座二つ目・真打の制度などが追々整っていった、という。

近聞 遠望

お知らせ申し上げます。

○永松寺 長谷川敏正師が晋山 去る十月、南区四本松町の永松寺にて伊藤文元老師の退董式と長谷川敏正師の晋山結制式が営まれました。

○瑞生寺 左右田泰丈師が結制をお勤めされました。東伊場町の瑞生寺にて式典が営まれました。

○源長院 松島脩一老師が退董 豊町源長院にて退董、晋山式が営まれました。

○福厳寺 福地正純老師が退董 曳馬町福厳寺にて退董、晋山式が営まれました。

新型コロナウイルスは落ち着いている状況ではありましたが、各寺院様においては万全の対策を施しての実施となりました。尚、当地区において、期せずして四か寺の退董、晋山式が挙行されたのは近年珍しい慶事であり、今後のご精進とご鞭撻を祈念申し上げます。

ご報告いたします

大般若会・新年拝賀式 一月十日

新型コロナウイルスに翻弄される中で、令和三年正月を迎えた。定刻十一時、殿鐘が打たれ呼応して鉦の音が届き導師の入堂が知らされる。すでに本堂には正装された各寺院さま方と総代さまが控えられている。やがて導師が入堂、導師焼香、五体投地の礼拝：総代様も三拝する。案内があり、新年ならではの「散華」がなされる。献湯菓茶の後、正月ならではの「大般若波羅蜜多経」の転読に入る。読み終えた後は、ねんごろな読経へと移り新年がスタートした。

春の彼岸法要 三月十七日

ワクチンの接種が待たれる中、コロナウイルスとの格闘は続く。永平寺に於かれても催事、会議等が中止や延期されているが、当山では三密を避けつつご先祖を想う気持ちを重んじ、故人を慕う心に添うべく今年も当山のみにて彼岸法要をお勤めさせて貰った。



納まる暇がない桶



位牌堂に...

山門施食会(盂蘭盆会) 七月十五日

新亡家(初盆のお家)の受付は玄関先。文書にてお知らせしてあり、混乱もなく「寺施餓鬼」は午後一時と三時の二回に分かれ、執り行われた。

本堂では密をなくすようご協力をお願いしてあり、一家庭二名様までのご参詣が守られ、用意された椅子がほぼ埋まる。会話も少なめ、本堂内は静かである。

導師の文元方丈が入堂。きびきびと焼香、礼拝の後、全堂挙げて法要に入る。

般若心経を読み上げ、導師が精霊棚に對面する位置に移り、「山門施食会」に移り、読経。続いて導師は檀信徒をはじめ諸精霊、大震災の犠牲



水向け

者への供養を告げる。続いて経をはさみ、個々に新仏の戒名を奉読された。経が続く中、新亡家のご家族は精霊棚に向い、水を手向け、ご冥福を祈った。夕闇迫る中、山門前で十九時、方丈さまはじめ僧侶が山門前に出座、精霊送りの法要が営まれた。

秋の彼岸法要 九月二十日

九月末まで緊急事態措置法適用という指示に従い彼岸法要は限られた規模の中で行われた。

しかし、開催時間が迫るにつれ参列者は西の間を埋め、瞬間に東の間の大半にも座を揚げられた。コロナ禍の中と言え、ご先祖さまへのご供養の気持ちに変わりはない。

法要はご開山傑堂義俊さま、歴代住職さま方、そして、檀信徒家ご先祖さまの亡き霊に祈り、感謝し、子孫の安らかな暮らしを願う営みである。経題紹介の後、読経、法語の奏上と続く。やがて香炉が回され、参会者全員が焼香の後、読経も終えて、導師退堂、



参列者に香炉が廻る

閉式となった。本来であれば、続いて清興の会(：日頃のお疲れをいやすお楽しみ会：)が開かれるが、延期となり、ご参会の皆様はお互いの身を労わる言葉を交わしつつそれぞれの家路に向かった。

ご案内いたします

●二月十二日(祭) 初午大祭

抽選会、お茶会、楽市は三密を避け、今年も中止と致します。



さあ、いらっしゃい(令和元年の初午)

●三月十八日(金)春のお彼岸会

法要は十三時半から予定はしていますが、コロナ感染状況によってお寺内にてのお勤めになることもあります。

◎ご協力ください。

当山へはマスク着用、三密を避けてのお詣りを、また行事内容の変更もあり得ることをご承知おきください。